

キャンヘルプタイランド

ネットワーク通信

2016年8月1日発行 第74号

タイ便り

今回は新運営委員からの奨学金授与式参加報告

奨学金授与式に参加してみた

今年から運営委員の一員にらせていただきました山本満紀子と申します。

7月2日から7月8日まで奨学金授与式をメインにカサロンの家と希望の家にも少し訪問してきました。

運営委員になりたての私は、奨学金授与式に行く前まで、奨学金授与式ってどうゆうことをするんだらう？奨学金をひとりひとりに手渡してどうゆうことなんだらう？奨学生の子たちはどんな子なんだらう？などなど、普段の生活では経験のないことばかりで正直頭の中はハテナでいっぱいでした。

でも、せっかく運営委員になったのだから、奨学金活動の内容やどれほど大切な活動なのかということなど、実際の現地の状況を自分の目で見てみたい！という思いから、今回同行させていただくこととなりました。

そして、実際に現地へ訪問してみて、たくさんの学生に会って、学校やお家へ行かせてもらい、今どんな生活を送っていて将来どんなことをしたいか、奨学金をもらったらどんなことに使いたいかなど直接話を聞くことができ、奨学金の大切さを心から感じる事ができ、日本とタイ、遠く離れていてもちゃんと繋がっているんだなぁと実感することができました。



なかでも実際に自宅へ行き生活の一部を見せてもらえたことは、笑顔でいるのが辛くなってしまうシーンもありましたが、現状を理解する上でとても貴重な機会となりました。

今回訪問したイサーン地方は、急速な発展を続けているバンコクとは違い、昔からの変わらない景色が残り、どこへ行っても人の温かさに触れることができ、ほっとできる場所でした。

奨学生の子たちは厳しい家庭環境であっても、キラキラした笑顔で接してくれたり、恥ずかしがり屋さんだったり、周りの人たちを大切にしながらまっすぐ頑張っている姿を見て、日本での自分がすごくちっぽけに思えるときもありましたが、何かできることがある限り少しでも力になりたいなと改めて感じました。

今回このような機会に同行させていただき、本当にたくさんの貴重な経験をすることができました。内田さんやムさんをはじめ、教育委員会の方や先生方にも心から感謝しています。

これからもキャンヘルプタイランドの奨学金活動を通して、ひとりでも多くの学生さんが社会に出て立派に自立していくことを応援していきたいと思います。

報告 1

～2016 年度奨学金授与式報告～

内田 由布子

今年の授与式は 7 月 2 日から 7 月 8 日の間にチェンマイ県、マハサラカーム県。カラジン 県、ロイエット県、ムクダハーン県、ナコンパノム県の 6 県で行いました。今年は運営委員 の内田がキャンヘルプタイランドの代表として授与式で奨学金を子供達に手渡ししてきました。無事終了できましたことと、並びに授与式で見聞きしたことをご報告します。

7 月 3 日 チェンマイ県

チェンマイ県はカサロンの家の子供たちへの授与式。カサロンの家も訪問した。このカサロンの家は山岳では学校に通えない子どもを集めて学校に通学できるようにするための寮である。10 年ぶりの訪問で当時はカサロンの家づくりに参加したが、雨風がしのげる寮 も出きており、豚、養鶏、畑などの自給自足がしっかり出来ておりこの 10 年間、運営者 と子供たちが頑張ってきた成果が同えた。カサロンの家には現状で困ったことはないとの こと。キャンヘルプタイランドは山岳部少数民族支援金の収入よりカサロンの家への支出が上回っており、プログラム上の経費は赤字である。

カサロンの家の支出は寮の運営費に使用されており、学費や食費がほとんどである。特に食費は大きな割合を占める。寮に入っている子どもが中学生高校生が多くなり、食べ盛りのためと思われる。一方でカサロンの家の母体団体であるラプー財団がキリスト教団体でもあるため（今回の訪問でも日曜礼拝があった）、単発的には宗教団体からの支援や寄付などがある模様。当会の山岳少数民族基金が増えなければ収入に応じた支援として減額方向となっていく予定である。運営者のタッサニーさんも高齢化してきており、後継者もどうなるのかはわからない。（その点是不蝶なので質問せず）新たに寮の生徒を増やしていくのか、事業を縮小していくのかは不明だが、現在在寮している生徒においては継続支援しながら様子を見るしかないように思われた。時間をつくって運営者のタッサニーさんと話をする。希望の家・カサロンの家の卒業生は二極化。村に帰って副村長として指導的立場に立つ子どももいれば、連絡がとれなくなった子どももいる。寮生同士で結婚して子どもをもうけて自立している子どももいる。大学を出ても（地域開発）その仕事が見つからずにタッサニーさんの手伝をしている子どももいる。成功した子どもはタッサニーさんの心の支えだがうまくいかなかった子どもは気がかりが残るとのこと。山岳の問題は複雑化。麻薬やお酒はもちろんだが最近では売春が非常にブームであると。昔のように貧困のために売春をするのではなく こすかい稼ぎなど気軽に行っており、山岳民族のラインのグループなどで連絡を取り合っている。SNS やスマホによるやりとりで目に見えない状態で様々な犯罪が起きており、子供達が巻き込まれないように神経を尖らせているとのこと。10 年前に寮にいたソムサッタという男の子が 25 歳になっており、私たちの送り迎えから何から世話をしてくれ非常に頼もしかった。寮を卒業後も次の世代を支える形が少し出来ており、この状態で継続されながら確固たる形になっていくといいのだが、と思いながら寮を後にした。

マハサラカームからナコンパノムは授与式の流れが同じなので、以下のようにまとめてご報告します。

【教育委員長のスピーチ】

マハサラカームでは奨学金へのお礼、学生に奨学金の使い方についての注意（家計簿をつけるように計画してやること）、各学校の先生たちに子供達を助けるように助言と指導を含めての依頼をしていた。カラシンではカラシン県について紹介してくれた。カラシンは 4 学区に分かれており学校数が 612 校、生徒数 11 万数人、主要産業は農業で米、キャッサバ、さとうきび。恐竜の遺跡あり。古い街もあり仏塔などの遺跡などもあり 1300 年の歴史がある。奨学金へのお礼とドナーへの感謝の言葉を述べられた。ロイエットではバンコクに両親とも出稼ぎでおらず貧しい家庭が多い。よく勉強していい仕事につけるように、奨学金のお金でよりよい人生、新しい人生が始まることなど生徒を励ます内容であった。

ムクダハーン県では奨学金の使い道について、遠方の子はパス代などもあるだろうからそれでもいいので有意義に使うこと、ドナーへの手紙を書くように推奨。自分の誇りに思うことや身の回りのこと。質問などでもいいので、恩返しをしようと思わなくていいから手紙を書いて、将来はタイ国のためになる人。立派な人になってほしいという話をされた。ナコンパノム県では子供の進学率を上げること、奨学金を大切に使うことなど。その後装人かの生徒に声をかけて話を聞いていた。スケジュールに追われずにゆっくり子どもの話を聞いた教育委員長はナコンパノム県のみ。

【出し物をしてくれた子どもたち】

マハサラカムでは出し物は中国語で歌を歌ってくれた子とタイの歌（演歌）を歌ってくれた子供の2名。カラシンでは日本について調べたことを話してくれた子。韓国語とタイ語で歌を歌ってくれた子。英語でスピーチしてくれた子供3名。ロイエットは出し物が富士山について調べたことをスピーチ（男子生徒）、日本語で挨拶をした女生徒、北海道と大島絵本についてと着物についての質問をしてくれた生徒3名、日本語で挨拶し日本についても日本語で説明した女生徒、日本について（たこ焼きと日本人の美容について）質問した女生徒が出た。出し物をした生徒は今までの県で最多である。ムクダハーン県は出し物を募ったが候補者がおらずこちらからムクダハーン県についての質問をした。人口、観光、料理、お祭りなど。観光はムクダハーンを一望できる場所があること、途中から先生が参加して子供の代わりに説明。お祭りはボートレースがあるそう。候補者0はこの県のみ。ナコンパノム県では質問者で聴覚障害の奨学生が出てきた。

【現在の奨学金の金額設定についての質問】

確かに少し望みないとは思いますが、それを元に子供が自分で品物を仕入れて売るなどして自分で増やす努力も出来る。考え次第だと思うという回答や他の団体のことを教えてくれる

県担当者もいた。奨学金の団体でみなやり方は違う。1500 バーツで1学区に70名の支援をする団体もあれば、小学生から大学生で価格設定を変えて支援する団体とある。少額を多人数に配り支援する団体と多額（高学年になる程学費も必要になる）を少数に配り支援する団体と2極化している様子。ナコンパノムでは高学年にはやはり少ないかもとの回答。さらにラオスに友人で校長をしている人がいるがラオスは支援はしないのか?と聞かれる場面あり。

家庭訪問を1人~2人/県してきましたので、数人ピックアップして報告します。主観的でなく客観的情報のみを提供する意味で箇条書きとなっていますのでご容赦下さい。

〈マハサラカム家庭訪問〉

- ・ニックネームはキン。小学6年生の新規の学生。小学3年からずっと成績が良く1番だったがキャンの奨学金対象者は小学6年生以上のため今までも家庭が苦しかったが申請されなかった。成績は4.0（全教科A）。恥ずかしがり屋で家庭訪問にとても緊張していた。将来は数学の先生になりたい。特に好きなのは数学。全教科に苦手意識はなくどれも得意だと。お手伝いもよくする。勉強は毎日2-3時間、復習もするが授業をしっかり聞くことが勉強方法として大切にしていると。
- ・家族は祖母、母（出稼でバンコク）、叔父（障害者）、姉、姉の夫（地元で労働者）、姉（19）、姉夫婦の子供（2）の8名と多く本来なら今の月収の倍ないと苦しい様子。
- ・田畑がないので現金収入に頼るのみ。
- ・父親と死別。母親がバンコクに出稼ぎに行っている。バンコクに住んでそこから仕送りされている。母親がいなくて寂しいとAPにある。
- ・叔父も一緒に暮らしているが足が少し悪く障害者。会ったが自分で出来ることをやっている。今日は蓮の茎を売り物にするために大量の蓮を取ってきていた。
- ・家はトタンで覆われており、1つの小屋に7人で暮らしている。

〈カラシン家庭訪問〉

- ・ニックネームはプロイ。中学1年生。昨年度からの継続学生。得意科目はタイ語。将来の夢は医者。好きなことは姪や甥と遊ぶこと。しっかりしていて物静か。成績は3.8。（A-B）普段は毎日2時間ほど勉強する。復習をしっかりやるのがコツとのこと。
- ・家は農家。父は不在。母親と甥と姪との4人暮らし。月収13000バーツ。田んぼが1600平米あり母親が主にそれを耕している。兄が居るが兄はバンコクに出稼。土木建築現場で働き仕送りしてくれている。
- ・母親は本人は家の手伝いをよくしてくれる、今は稲の植え方を教えていると。将来の本人の夢を聞くと「そんなお金はうちにはないわ。」と笑っていたが本人がやりたいようにやらせたいとのこと。
- ・家はコンクリートで作られた家。母親がいるためか生徒が情緒的に安定している印象。

〈ロイエット図書館視察〉

- ・ブンガーム学校の図書館を視察。図書館は立派な建物。小二の子供たちが元気いっぱいに出迎えてくれた。
- ・子供たちは図書館をよく利用すると。視察中も子供たちが絵本を読みふけていた。
- ・図書は分類されておらず。それは化学室屋や教室などに本を図書コーナーで置いているからだそう。だが全く分類のシール、目録などはない。
- ・図書は絵本が手前、中間に寄付された教科書、奥に古い教科書があり、古いものはもう利用しないので捨ててもいいが、本棚が空になるため、見栄えを考えて捨てずに置いているとのこと。
- ・貸出記録も見せてもらったが、あまり厳格に貸出期間などは設定されていない。記録も去年のもので、あまりしっかりと管理されている気配はない。
- ・キャンからお金をもらったら何に使いたいかを尋ねると、本棚や机と椅子、入り口にタイルを敷き子供が座る場所も作りたいた。本の購入というよりハード面の整備に使いたい様子。

〈ロイエット家庭訪問〉

- ・1件目は継続奨学生。ニックネームはアム。中学1年。タイ語が得意でコンクール優勝経験もあり。タイ語の俳句もつくる。物怖じしない感じだがおとなしい。成績は3.8。苦手科目なし。
- ・家族は祖父、叔父（腎臓疾患で退院直後、在宅療養で酸素吸入もしている）、いとこが3名（12、6、4）。両親は離婚してそれぞれ再婚しているが子供は祖父に預けたまま。土地がなく現金収入に頼っているため、貧しい。祖父はゴミを拾ってきれいに売ったりいろいろして生計をたてている。
- ・祖父は孫に好きに生きて欲しいとのこと。お手伝いもよくする。特に空芯菜炒めが上手だと。
- ・2件目は新規奨学生。ニックネームはポイ。小6。得意科目は算数で将来は会計の仕事に就きたい。非常におとなしく人見知りでもとても緊張して泣き出しそうな感じ。先生によれば以前は物怖じするため人と話すことも得意でなく、話しかけてもわからないなどといっていたが、勉強は出来るので（3.8）、コンクールなどに出させてもって人前で話す訓練をさせていただいぶよくなったとのこと。予習復習もして毎日30分ほど勉強する。奨学金は文房具など学用品を買うことに使いたい。
- ・家族構成は祖母2名、両親2名の5人家族。祖母は本人が得意なことを生かして、会計など好きな仕事について欲しいと言っている。
- ・家が昔風の小屋で壁がない。台所もまきで火を起こして料理を作る。

〈ムクダハーン家庭訪問〉

- ・1件目はキャン支援の男子。ニックネームはエックス。
- ・成績は3.8。勉強は時々する。
- ・母親はゴム園で夜から明け方まで働き、朝子供を送り出してから昼まで工場働いている。睡眠は昼間。
- ・週末には家族全員でゴム園で働く。エックスくんも家の手伝いをする。母親は好きなように生きて欲しいとのこと。
- ・将来は警察官になりたい。昨年も警察官になりたいと書いて絵も描いている。理由を尋ねると警察官になって国を守りたいのと村から麻薬を撲滅したいと。強い意志を感じる。

【総括】

奨学生の家庭環境は両親、特に母親がいるかないかで情緒面が安定しているかどうか分かる様子。母親が出稼ぎにいかないで一緒にいる子どもは表情が明るい。学年が上がるにつれて成績にも影響していくだろう。また農地がある家と現金収入のみの家でも格差が見られる。現金収入のみの家は、貧しい様子である。

奨学金授与式には綺麗なシャツを着てきているが、普段はしまっている新品を着てきているのかもしれないし、泥が取りきれないシャツをきている子、制服の名前の刺繍が違う子ども（制服を誰かからもらった可能性）、シャツの襟が擦り切れている子どもなどがいる。私が子どもたちを授与式や家庭訪問で見るときは、その子どもの靴を見るようにしている。貧しい子どもは靴にかけのお金がないと思うためだ。家庭訪問でもやはり靴がくたびれて履きつぶしている子どもの家は貧しかった。ただ私がキャンヘルプタイランドの支援を始めた1993年は貧しさのために女子の子どもを売春宿に売するような状態であった。それが貧困といってもかなり底上げされてきたなあという印象である。とはいえ、いまだにかなりの貧困の只中にある生徒もおり、その環境を考えると「まだこんなに家庭環境が厳しい生徒がいるのか。。。」と思わされる子どもも

いた。(ロイエットの生徒) そういう生徒は各県にちらほらおり、地元の先生や教育委員会の人々も「あの家は大変ですよ。」と口々に同情するほどであった。こうした生徒には奨学金は必要であろう。

また今回、ほぼ全ての県の教育委員会の人に当会の奨学金の価格設定を聞いた。上記報告に記載しているので、興味のある方は確認してほしい。回答はバラバラではあったが、私見ではやはり高校生や専門学校生に3000バーツは少額という印象である。進学する高等教育(短大・大学)のため奨学金が必要と思われる。キャンヘルプタイランドは今まですみれ基金があったが、すみれ基金が終了後は対応するプログラムがない。現地での需要と当会のシステムにズレがでてきたと言わざるを得ない。また今回障害者のこどもが奨学生となったし、小学校から貧しい子どもなどよりニッチな支援を模索してもいいかもしれない。少額で大人数をカバーする方法が高額で高等教育まで支える方法か他の奨学金団体も2極化しているようである。

キャンヘルプタイランドはお金や建物を寄贈するスタイルの団体であるが、山岳少数民族ばかり奨学生支援ばかり、現在では相談に乗ったり地域コミュニティに入り込むような形での支援をせねば解決しない事柄が多くなっている。それだけ社会問題が複雑化している証拠でもある。なのでキャンヘルプタイランドの方法での支援には限界があるようにも思われた。もちろんその従来の方のままで支援を継続するという選択もある。

大風呂敷は広げず細々と支援していてもそれはそれで問題はない。

バンコクの発展ぶりを見る限りタイ国は中興国入りしており、貧しいタイではない。日本と同じく東京と地方の経済格差と同じ構図だと思う。本来ならばタイの社会福祉政策にて貧困家庭をカバーするべきかなという考えもよぎるが、反対に子どもの支援をするのがどの国の大人であってもいいじゃないかという考えも自分にはある。

初代会長のハリー・レイが最終目標として掲げた「タイ人のタイ人によるタイ人のための支援」への移行は、経済は発展したがその後繋がる様子はないようだ。奨学金はタイやキャンヘルプタイランドにご縁を感じて篤志を下さるドナーの皆様の善意であるだけに、今まで通り奨学金を必要とする学生への支援に使うとともに、移り変わるタイに対してキャンヘルプタイランドの方向性も含めて検討していく必要性を感じた。

今回は動画を撮ってきました。

家庭訪問をした子どもの動画をキャンヘルプタイランドのホームページ内にあるブログに随時載せていきます。どうぞご覧ください!! ホームページ <http://canhelp.jp>

～家庭訪問先の子供についての報告～

今回の授与式後の家庭訪問で一番印象に残った子供についてご報告します。

最後に訪問したナコンパノム県の(NP-S-095) 氏名 ムックちゃんです。

授与式ではキャンヘルプタイランド(CHT)の代表者のスピーチの後に子供達が自発的に出し物をしてくれますが、今回は子供からの質問もありました。その時に彼女は先生と一緒に出てきて質問を始めました。

手話でした。質問は「私のような聴覚障害者の人が日本にはいますか?どんな仕事についていますか?」というものでした。私には聴覚障害を持ちながら補聴器をつけて看護師として勤務している友人がいたので、そのことを彼女に通訳者を通じて伝えてもらいました。日本にも聴覚障害を持つ人がいることはわかったものの、彼女は先天的な聴覚障害で補聴器は全く役に立たないとのこと、補聴器が使えない聴覚障害者は知り合いにいなかった、それ以上の回答はできませんでした。

そして午後の学校視察と家庭訪問はこのムックちゃんと仲の良い同じ学校で奨学生のピーアちゃんとムックちゃんが通う学校、及び彼女たちが暮らす家を訪問することになりました。訪問した学校はバンサムラン学校です。今年は初めて

健常児と同じ学校に通学する試みを始めたそうです。学校全体の生徒数180名。中学一年生の10名の聴覚障害児を受け入れました。この聴覚障害児は支援団体の元で寮生活を送っています。昨年は小学六年生で同じ学校に通っていましたが中学進学に当たって、どの学校からも通学を断られていたところ、この学校の校長先生が受け入れを決めたそうです。校長先生がこの決断をしたのは、1) この子供達を小さい頃から知っていたこと、2) 小学校で熱心に子供達を支える先生と知り合いであったこと、3) 小学校でも手話通訳をして子供達を支えていた先生が定年退職後もこの中学校にボランティアとして来校して手話通訳を手伝ってくれること、4) 支援団体が手話通訳者を2名派遣してくれるという配慮があったこと、ということでした。当初は学校の負担が増加するのでは、という懸念もあったそうですが、全く杞憂に終わり現状では良い影響ばかりだととても嬉しそうです。というのも、健常児の子供達は当初は筆談で聴覚障害児とコミュニケーションをとっていましたが、遊んでいるうちに筆談がまどろっこしくなり自主的に手話を覚え始めたそうです。手話クラブも自然とでき、手話クラブでは聴覚障害児が先生となって他の子供達に手話を教えます。私が見ていると、同じ奨学生同士でとても仲の良いピーアちゃんとムックちゃんは自然に手話で話しをしています。授業もちろん手話通訳が必要で通訳者は2名おり、20分毎に交代で通訳をします。

この後に、家庭訪問をしました。ムックちゃんは支援団体の寮で生活しています。「学校はとても楽しい。」と。得意科目は数学。成績は4.0（日本で言えば全ての科目が優もしくはAです。）よい成績をとるコツを聞くと耳が聞こえないので通訳の手話をよく見ること、ちょっとでも横を見たりするといけないとのことでした。寮に帰っても復習をするそうです。寮生活なので自分のことは自分でやるとのことで料理も得意だそうです。本人の家庭環境を周囲から聞くと両親は離婚し、母親は再婚後ムックちゃんを引き取らなかったそうです。この寮の男女10名はみな同じ年頃で小さい頃から



一緒になので兄弟姉妹と同じようなものだとのこと。この寮は聴覚障害者を支える会が運営しています。寮には聴覚障害者で学校を卒業したOBがきて炊事など子供のことを手伝っています。会長は聴覚障害者の女性で、聴覚障害を持つ子供が生まれた村に出向き、親の了解を得て家から寮に引き取り学校に通わせているそうです。この支援団体の会長さんが不在だったので他の子供のことなど詳細がわかりませんでした。お会いできたらもっと詳しく話しが聞きたかったなあと思いました。聴覚障害児の世話を熱心に行っている新米の英語の先生も強く印象に残りました。今年、教師になったばかりのこの先生はこの寮のことを大学生の時に知り、手伝い始め、教育実習中に手話講座が別の県であると聞き、実習中に週末をつぶして講座にでて手話を学びました。今では通訳者としての腕は一番だと周囲に言われるほどです。毎日夕方には子供の勉強の復習の手伝いで寮に出入りしているそうです。

日本の福祉界では北欧のインクルーシブ教育が昨今さかんに言われています。インクルーシブ教育とは『健常児も障害児も共に障害のある子どもを含むすべての子どもに対して、子ども一人一人の教育的ニーズにあった適切な教育的支援を、「通常の学級において」行う教育のこと』です。とはいえ、実際の導入となると日本では様々な段取りや会議などを経ねばならず思い切ってやってみるということにはならないように思えます。今回のこの場合は、支援団体と援助する周囲の環境（先生方）などがうまく相互作用したこともあります。私にはやはりタイの共同体の相互扶助の力の強さを見せつけられたように思います。そしてまあやってみようという懐の深さといい、タイの人と人との助け合いの力の強さを改めて感じた出来事でした。

ムックちゃんから「また会いましょう！」という手話をタイ人も日本人もみんなが教わって、帰り際には手話で「また会いましょう！」を繰り返しながら別れました。充実した授与式が素晴らしい出会いで締めくくられました。




報告2

～すみれ基金～

2011年に発足したすみれ基金は6年目を迎えて計画では最終年度となりました。この間に19人の学生が大学、または短期大学に進学しました。

2012年度に初めての卒業生が社会人となりそれぞれの分野で活動していらっしゃいます。

2016年度は以下の3名をすみれ奨学生として支援いたします。

	ナランヤー・カノックサンパンポーン（ジェーン） 女性 北部メーホンソン県出身 専攻：簿記 短大2年 4年制大学への編入希望 彼女は成績優秀で今年すみれ奨学生となって、来年は大学へ編入して引き続きすみれ奨学金の支援を希望しています。2017年に正規編入が確定した時点で2年間すみれ奨学生として支援いたします。
	セーンスック・ナンシー（ノン） 男性 北部チェンマイ県出身 カサロンの家 専攻：会計 メーファールアン大学 彼は「カサロンの家」の出身学生です。彼の頑張りは後輩たちにどれほどの励みになることでしょう。とても楽しみな存在です。頑張ってくださいね。
	ガンボン・スーブシー（ボン） 男性 東北部スリン県出身 専攻：教育学 5年の支援希望 成績良い。祖母（母方）と伯父と一緒に住んでいる。伯父は体が不自由（仕事できない）。祖母は蚕の養殖している。生活費もほとんど伯母が出している。本人はアルバイトとしてダンスを教えたり、お店の手伝いなどをしたりして生活している。

計画では2016年度が最後の募集となっています。2016年度に3名の奨学生が決定して、「すみれ基金」募集奨学生・年度別・実施表としてまとめてみました。

	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	合計
001	○	○	○	○	○						5
002	○	○	○								3
003	○	○									2
004	○	○									2
005	○	○									2
006		○	○	○	○						4
007		○	○	○	○						4
008		○	○	○							3
009		○	○								2
010			○	○	○	○					4
011			○	○							2
012			○	○							2
013				○	○	○	●				4
014				○	○	○	●				4
015				○	○						2
016				○							1
017					○	○	●	●			4
018					○	○					2
019					○	○					2
020					○	○					2
021						○	●	●	●	●	5
022						○	●	●	●		4
023						○	●	●			3
人数	5	9	9	11	11	10	6	4	2	1	68
支援額	269,500	218,300	492,800	360,500	387,000	470,000	282,000	188,000	94,000	47,000	2,809,100

注：行は奨学生、列は奨学金支援年度を表します。 ●は支援予定

最終年度2020年までに短大・大学を22人の奨学生が卒業いたします。この間、残念ながらお一人の学生が病で亡くなりました。まことに残念でした。2020年度を終えて、残金が発生しましたら改めて使い道を検討いたします。

報告3

～カンボジア支援プログラム進行中～

前号のネットワーク通信でお伝えした通り、カンボジアの小学校でのトイレ不足を解消するための支援プログラムを徐々にですが進めています。7月20日の時点で合計9万円の寄付金が集まり、目標金額の30万円の3分の1に到達しました。ご協力ありがとうございます。引き続き皆様に募金のご協力をお願いするとともに、いろいろな団体の助成金申請を合わせて行い、来年の1月をめどに目標金額の達成を目指していきます。そして、2017年3月には支援の実施ができればと考えています。今月にもう一度現地へ行き、トイレ建設に向けもう少し具体的な話し合いを行ってくる予定です。



お知らせ

～特定非営利活動法人キャンヘルプタイランド～

皆様からのご寄付の入金先だった郵便振替口座の名義が「キャンヘルプタイランド」から「NPO キャンヘルプタイランド」と変更になりますのでご注意ください。

寄付金・会費のお振込みは…

＜郵便振替口座＞

口座名：NPO キャンヘルプタイランド
番 号：00280-2-43793

運営委員会

(2016年5月～2016年7月)

活動	月日	場所	内容
運営委員会	5月	事務所	奨学金授与式について
運営委員会	6月	事務所	交流ツアー説明会 授与式出発準備
運営委員会	7月	事務所	奨学金授与式報告 交流ツアー研修会

運営委員募集中！

通常は毎月第4土曜日に事務所に集まり、会の運営について話し合っています。見学でも結構ですので是非事務所へ遊びに来てください。

次回の運営委員会は **開催日未定のため参加希望の方は事務局までメールでお問い合わせください。**

編集後記

タイでも大学生は普通にノートパソコンを使ってレポートなどを書いています。ですが、すみれ基金の奨学生のように、奨学金をもらって大学に通っている学生にはパソコンを買う余裕などありません。そこで、キャンヘルプタイランド会員の皆様で、ご家庭でご不要となったノートPCのある方は、事務局へ送っていただけると幸いです。リサイクルしてすみれ基金奨学生へプレゼントしたいと思います。ただし、2008年以降発売のものに限り、できればWindows7以降の機種をお願いします。申し訳ありませんが送料はご負担ください。ご協力お願いします。

＜キャンヘルプタイランドネットワーク通信 Vol.74＞

発行 NPOキャンヘルプタイランド
 発行人 西川 弘達
 編集人 坂 茂樹
 発行日 2016年8月1日
 住所 〒450-0003
 名古屋市中村区名駅南2-11-43
 NPOステーション内
 Tel & fax 052-566-5131
 (OPEN: 土曜の13~16時頃)
 E-mail: office@canhelp.jp
 ホームページ: http://canhelp.jp